

徳才子 青良（とくさいし・せいら）

1、プロフィール

俳人。昭和30年、俳誌「暖鳥」に入会。俳誌「氷原帯」、「風」を経て58年「海程」に入会、金子兜太に師事。「古き良きものに現代を生かす」精神を宿し独特の詠風を貫いた。

<生没>

1927(昭和2)年11月12日 ~ 2018(平成30)年10月10日

<代表作>

青年が棒状に棒状に運ばれる
かたつむり湖わたらねば目を失う
白鳥をしずかに抱けば酔いはじまる
堤川大葭切にだまされて
青い馬八甲田山ではねている

<青森との関わり>

青森市生まれ。青森県現代俳句協会会長、青森県俳句懇話会会長を歴任し、県俳壇の第一人者として君臨した。

2、作家解説

昭和2(1927)年、東津軽郡筒井村(現青森市)に生まれる。本名は徳差政良。青森工業高校卒。海軍少年兵に志願、千島列島に配属、北海道で終戦。復員して青森県に勤務、主に農林関係の基盤整備に従事し、定年退職。

昭和30年、俳誌「暖鳥」に入会、吹田孤蓬、成田千空、新谷ひろし、千葉菁実、豊山千蔭、橘川まもるらと研鑽。一方、中央の俳句結社、俳誌「氷原帯」(主宰細谷源二)、俳誌「風」(主宰沢木欣一)等を経て、38年、俳誌「海程」(編集者金子兜太)に入会、同人となる。37年8月に青良は千空に連れられて青森駅前の奥田旅館で初めて兜太と会っている。兜太は俳誌「寒雷」(主宰加藤楸邨)青森支部

(支部長佐藤男郎花)俳句大会の特別選者として来県したのだった。40年、「海程」は兜太主宰誌となり、「古き良きものに現代を生かす」という現代俳句における新しい伝統の確立と、そのさらなる拡充が展開されることになる。青良にとって、兜太との出会いは俳句人生の中で劇的であった。昭和58年8月10日、海程新社から句集『徳才子青良句集』を出版。平成8年、俳句同人誌「黒艦隊」を創刊。平成14年5月3日、黒艦隊俳句会から句集『ハッ橋』を出版。平成26年12月10日、東奥日報社から『徳才子青良句集 旅人かえらず』を出版。〈八月の涙が涙を流している〉〈人柱へ拳手の礼して吹雪きけり〉

この間、昭和35年に第13回暖鳥賞、41年に第3回海程賞、平成9年に海程の第21回海隆賞、20年に第17回青森県芸術文化振興功労賞、青森市表彰(俳句部門)等の受賞歴がある。平成13年から22年まで3期9年間、青森県現代俳句協会会長、22年から30年まで顧問。3年から13年まで5期10年間、青森県俳句懇話会専務理事兼事務局長、26年、副会長、27年から29年まで1期2年間会長、29年から30年まで顧問。県俳壇の牽引者の一人であった。令和元年11月、黒艦隊俳句会によって青森市「文芸のこみち」に〈青い馬八甲田山ではねている〉の句碑が建立された。